

臨地実習前の客観的検査技術能力試験がもたらす学生への教育効果

檜山由香里 山田洋之 谷口智也 大西英文
(昭和医療技術専門学校)

Key words : 客観的検査技術能力試験、段階別採点表、技術保証

【目的】本校では、すでに臨地実習後、卒業レベルの基本的な技術水準を確保するために、客観的検査技術能力試験（以下 OSCE）を導入している。その試験では、学生一人一人の弱点や臨地実習での習得度を知ることができ、教育上その意義が大きい。そこで、今回、臨地実習前に学生の弱点を克服する教育カリキュラムを開発するために、検査技術能力試験の導入を試みた。その結果、形成的評価は学生のやる気度を高め、技術水準の向上に繋がっている。

【対象及び方法】対象は平成18年度第2学年生76名、OSCE実施日は平成19年2月26日、27日、28日の3日間とする。試験内容は、3つに分け初日は ABO式血液型判定と交差適合試験、2日目は HE染色と尿沈渣標本作製、3日目は 心電図検査を行う。試験時間は 30分、35分、12分とし、 はグループ単位（7～8名）で時間帯をシフトし、10回実施する。 は実技者2名と模擬患者役2名単位で入れ替わり実施する。又、 ～ に対してすべてフィードバックを行う。内容は 3検体をオモテ試験とウラ試験、交差適合試験（生理食塩水・プロメリン法）を行い適合血を選択する。

未染色標本のHE染色と既知標本の検鏡を行う。同時にその作業と平行して、尿スピッツへの採尿、遠心、デカンテーションの操作を行い、細胞等を確認する。 模擬患者接遇と標準12誘導を行う。実技試験終了後、学生へのアンケート調査を実施し、また学科責

任者は試験担当教員にも対面式聞き取り調査を実施する。

【結果】実技試験の評価は段階別採点表を用い、平均点は 83.3点、91.0点・89.1点、81.5点であった。アンケートの『力が発揮できましたか』の問いに、できたと回答したのは 52%、45%、48%であった。又、『この様な実技試験が必要ですか』の問いでは、92%が必要と回答した。さらに、『4月からの臨地実習に不安がありますか』の問いでは74%が不安と回答し、同時に、学校に対して臨地実習が開始される前に技術能力の対策を講じてほしいとの要望が多く寄せられた。

【考察】臨地実習前の技術能力試験を評価する試みは、学生一人一人の弱点を知ることができ、いままでの学内実習の基本的な総合評価にも繋がり、教員と学生の双方に有用である。試験結果は、臨地実習後に行う技能試験と比較し、当然ながら低い点数となっている。又、評価に形成的評価を導入することで、学生にやる気を起こさせ、価値ある変化をもたらした。本校では、この結果をもとに学生の前向きな意見を取り入れ、この試みを前進させた。学生の弱点となる知識、技術、接遇の3つのコースを設定し、改善プログラムを展開した。今回報告した臨地実習前の技術能力試験とさらに前進させた改善プログラムは、臨地実習における技術能力の向上につながるものと期待している。

連絡先：igi-rinken@showa.ac.jp